
君と出逢う場所...

斎藤 レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と出逢う場所…

【Nコード】

N0746A

【作者名】

斎藤 レン

【あらすじ】

大学受験を控えた主人公・神城雅樹が名も知らぬ女の子と出逢い、そして…。

俺は神城雅輝。高校3年生。高校3年と言えば受験シーズンである。しかし俺は今駅前の銅像の前に立っている。

特に誰かを待っている訳でもなく、何をしたい訳でもない。

「はあ…、予備校行くのめんどくさいなあ… 受験勉強ばかりで出逢いもないし… なにかいいことねーかなあ」

そんなことを思いながらふと前を見てみると

「ねえ今時間ある？」

……はい???

突然目の前に女の子が表れた。しかもかなり可愛いく俺の好みだ。

「ねえ時間あるなら付き合ってよ!!」

「え!?!でつでも俺これから予備校行かなきゃいけないから…」

「いいよ行かなくても たまには息抜きしなきゃ疲れちゃうよさ
っ行こっ」

俺は馬鹿だ。

いきなり会った知らない女について行ってしまった。
これが新手の詐欺だったらどうする気何だおれは…。

「ホラッぽつとしてないで早く行こっ!!」

女は俺の腕を掴んできた。胸が当たって少し気持ちよかった…。

「なんで!?!どうしてわかったの!?!」

俺は今駅からそんなに遠くない喫茶店にいる。

「ふふっ。さてなんででしょう?」俺が何故こんなに驚いているのか。

それはさっきあったばかりの彼女に俺の好きな物や趣味、特技等を言い当てられたからである。

彼女が言うには昔から直感力が強いからわかったのだという。

雅

「じゃあ俺の名前言い当ててみてよ!!」

女

「うん……マサキ!」

雅

「えっ!?!何で解ったの!?!」

女

「だってそのキーホルダーに書いてあるんだもん（笑）」

雅

「なんだ〜びつくりした（笑）」

雅

「改めて自己紹介するよ。俺は神城雅輝。君は？」

女

「私？私はねえ……。内緒（笑）。」

雅

「いや…内緒はないだろう…ちゃんと教えてよ。」

女

「いいじゃんいいじゃん。名前なんか。とりあえず別のところ行かない？ねっ？」

結局彼女は名前を覚えてくれないまま俺は彼女と一緒にいろいろなところに遊びに出掛けた。

カラオケ、買物、ゲームセンター。

さらには野球がやりたいといい始めたので野球をやることにした。

女

「雅輝く、投げていいよ」

雅

「ばかめ。俺はこれでも中学は野球部だったんだぞ。くらえ！」

カキーン！

雅

「えっ！？」

女

「ヤッター！何だたいしたことないじゃん。」結局投げた球全て打たれかなりへこんでいた。

女

「今日は調子が悪かったんだよ。」

その彼女の言葉がいまの俺にはとても痛かった。

気がつけば夜になっていた。あたりも暗くなり、人通りも殆どなかった。俺は隣りにいる彼女の顔を覗き込んだ。

雅

「楽しかったね。俺こんなに楽しかったの久しぶりだよ！」

女

「ふふっ。私も楽しかったよ！でもちよつと疲れちゃったかな…。」

ねえ私シャワー浴びたくなっちゃった。」

雅

「え!？」

辺りを見回してみるとホテル街だった。

”いつのまにこんなところまで来たんだ!？てかもしかして俺もとうとう……………”

”シャーーー…………”

雅

「ここにタオル置いとくね。」

女

「ありがとー」

彼女はシャワーをあびている。

しかしここはホテルではなく俺の家である。

彼女が俺の家に来たいというので連れてきたのだ。

雅

「はあゝ…残念だったなあ…」

女

「何が残念だったの？」

雅

「いついかなんでもないよ。」

女

「怪しいなあゝ何かエツチな事でも考えてたんじゃないの？」

雅

「そっそんなわけないじゃん！」

” やつべ。何で解ったんだろう？ ”

そんな事を思いながら俺は脱衣所を出た。

母

「誰かお風呂入ってるの？」

雅

「うわあ！！！」

俺は思わず大きな声を上げてしまった。

雅

「どっとうしたんだよおふくろ。もう12時過ぎてるじゃん！？寝てなかったの！？」

母

「喉が渴いたから何か飲もうと思ってね。」

雅

「じゃ、じゃあ俺持っていくから布団に戻ってなよ。」母

「めずらしいわねえ、ゆきでもふるんじゃないかしら。」

：

雅

「ふう、危なかったあ。心臓止まるかと思ったぜ。」

”ガチャ”

俺は再び風呂場のドアを開けてみると彼女の姿はそこになかった。

雅

「あれ？どこいったんだ？」

女

「雅輝、こっちこっち」

雅

「お前いつ出たんだよ、てかなんで俺の部屋の場所知ってるんだよ！」

女

「まあきにしないきにしない（笑）ねねアルバム見てもいい？」

雅

「好きにしてくれ……」

もう彼女のやりたいようにさせてやることにした。

しばらく俺は彼女と二人でいろいろな話題で盛り上がっていた。しかしやはり彼女の素性だけはしることができなかった。何だかんだで気がつけばあれから2時間以上たっていた。

女

「私そろそろ行くね。」

雅

「えっ！？帰るの！？」

女

「ごめんね。」

雅

「また、会えるよね？」

女

「……………」

突然俺の唇にふとやわらかいものがかさなった。それは彼女の唇だった…。

女

「また会えるかは君次第だよ…。」

そついうと彼女は行ってしまった。

俺はその場から一步も動けなかった。

ただ彼女の唇のやわらかさと温かさだけが残っていた…。

あれから一週間が立った。俺はあの時から彼女と初めてあったあの場所にずっといる。何だかここで待っていれば彼女に会える。そんな気がしたからだ。

雅

「やっぱりここにいてもダメかなあ。はあゝまた会いたいな。」

そんな事を考えていた。

雅

「そういえば前もこんな事が会った来がする。あれはたしか…」

そうあれは確か卒業式の前日にクラスの女の子にラブレターをもらった。

けれど俺は行かなかった。

いや、正確には行けなかったのだ。

あのとき俺は目覚ましを間違えてしまい寝坊してしまった。

次に起きてみると時間はもう既に過ぎており待ち合わせ場所に彼女の姿はなかったのだ。

まさにあの時と同じ心境であった。

雅

「あれ？そういえばあの娘の名前なんだっけかな。えっと。あっ！そうだ確か武内…」

「武内由起子」

突然後ろから声がした。

由起子

「ようやく思い出してくれたね。」

雅

「ああ。ようやく思い出したよ。すっごい綺麗になってたからわからなかったよ。あの時は本当にごめん。」

由起子

「うっん、謝らなくて良いよ。もう気にしてないから。もう一回い
えばいいことだからね。」

由起子

「じゃあ言うよ。私は雅輝君が好きです。」

雅

「ああ。俺も君の事が好きだよ。」

由起子

「あは、嬉しくて涙出ちゃった。」

俺は彼女の涙を拭い、そして彼女にキスをした。

（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。このあと二人がどうなるかは皆さんの想像にお任せします。初めて書いたので不適切な表現があつたかもしれませんが、あまり突っ込まないで下さい（笑）これからもいろいろ書いていきたいと思うのでよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746a/>

君と出逢う場所...

2010年12月29日21時06分発行